

日中韓フォーサイト事業
事後評価（平成28年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 東北大学大学院理学研究科（教授・上田実）
研究交流課題名 アジア化学プローブ研究拠点

評価結果（総合的評価）

- | | | |
|---|---|-----------------------------------|
| ○ | S | 想定以上の成果をあげており、当初の目標は達成された。 |
| | A | 想定どおりの成果をあげており、当初の目標は達成された。 |
| | B | ある程度成果があがり、当初の目標もある程度達成された。 |
| | C | 成果が十分にあるとは言えず、当初の目標はほとんど達成されなかった。 |

所見

本課題では、我が国の強みであるケミカルバイオロジーを牽引する一線の研究者が主導権を発揮し、構造生物学に強みを持つ中国、イメージングプローブの開発に強みをもつ韓国の特徴をバランスよく織り交ぜた研究と人材教育のネットワークが形成されるに至っており、高く評価できる。特に、若手のトレーニングに特化したプログラムを軸に、具体的な共同研究に落とし込む流れがうまく機能し、様々な年代の研究者が参加する層の厚い研究拠点が構築出来ている。事業期間の後半は新型コロナウイルス感染症の影響を受けたものの、当該分野で国際的な評価が高い論文誌を含む19報の国際共著論文が出版されるなど、学術的価値の高い研究成果が得られている。

若手研究者の育成としては、若手研究者間のネットワークの構築、秀でた人材に対するトップ研究者が集まる場での発表機会の提供、若手PIの研究開拓支援など、独創的な段階別の育成を実行している。国際共著論文や国際会議の発表件数、事業参加者からのアカデミア職に進む人材輩出などから、その効果が認められる。交流相手国への若手研究者の派遣、および相手国からの留学生の受け入れも実施し、より強固なネットワークも構築できている。

今後、期待するところは、本事業で活性化された日本の若手研究者が国を超えた研究拠点を構築すること、また日本とのネットワークを構築した国外の研究者が日本国内で研究活動の機会を得て、日本のケミカルバイオロジーの発展に向け新しい流れを生み出すことである。今回、母体の大きなアジア化学プローブ拠点が構築できたことから、このネットワーク間で開始された共同研究が今後実を結び、数多くの先端的な成果が発信されることが望まれる。